

Part4 メーカー / Sierそれぞれの取り組み

「エコ」で顧客は振り向く

省エネ化による機器の付加価値向上、エコを切り口とした提案力アップ、そして環境見える化ソリューションのドアノック商材としての活用。すでに「グリーンICT」ビジネスは動き出している。 文 藤田 健、坪田弘樹(本誌)

シスコシステムズ

EnergyWiseで端末の電力量を集中管理

シスコシステムズのグリーンICTへの取り組みは、データセンターにおけるエネルギー消費削減、データセンター以外のオフィスIT環境のエネルギー消費削減、建物全体のエネルギー消費削減、働き方の変革による生産性の向上と消費電力の削減の4つの切り口からなる。EnergyWiseがグリーン of ICT、EnergyWiseがグリーン by ICTに当たる。

同社によれば、ICT機器の消費電力のうち、データセンターの割合は45%で残りの55%はオフィスのICT

機器が占めるという。このため今回は EnergyWise (エナジーワイズ) ソリューションを活用した取り組みを紹介する。

このソリューションは、シスコの Catalystスイッチ製品群に新たに導入したEnergyWise技術により、ネットワークに接続されたICT機器の電源コントロールを行うものだ。まずフェーズ1として、IP電話や無線LANアクセスポイント、IPカメラなどのPoE機器を管理対象にしている。

エンタープライズマーケティング・マ

ーケティングマネージャの小坂哲也氏は「別途新製品を購入する必要はなく、導入済みのCatalystスイッチのIOSをアップグレードすれば利用できる」とメリットを語る。ユーザーのCO2削減への意識の高まりはまだ十分ではないが、同社ではスイッチを長く利用してもらうための付加価値としてEnergyWiseを訴求しており、「かなり好意的に受け止められている」という。

電力消費量を「見える化」

EnergyWiseは、「モニタ」「マッピング」「チェック」「アクション」からなる「オペレーティングサイクル」というコンセプトを採用した。

まず、ネットワーク接続されたPoE機器の消費電力をモニタし、「どの機器が、どこでどれだけ電力を消費しているか」を「見える化」する。これに基づいて「マッピング」でポリシーを設定する。EnergyWiseは機器単位で自動的に電源のON/OFFが可能であり、「Importance(重要度)」と「Priority(優先順位)」の2つの値でインテリジェントに管理している。Importanceは管理対象の機器にあらかじめ設定しておく数値のことで、例えば、営業フロアと会議室にIP電話がある場合、営業フロアのIP電話を70、会議室のIP電話を40に設定

図表4-1 Cisco EnergyWiseの大きな動き

